

歴史的蓄積を有する地方都市における地域景観 まちづくりの取り組み -岐阜県恵那市大井町での まちづくりワークショップを通じて-

松田 恵理子¹・佐々木 葉²・安永 祥平³

^{1,3}非会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科建設工学専攻

(〒169-8555 東京都新宿区大久保三丁目4-1 51号館16階02教室)

E-mail:eriko-m_1005@fuji.waseda.jp

²正会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科

(〒169-8555 東京都新宿区大久保三丁目4-1 51号館16階02教室)

E-mail:yoh@waseda.jp

2008年に施行された「地域における歴史的風致の維持向上に関する法律」を受け、各地で歴史を活かしたまちづくりの検討が進む。しかしその主な対象となる地方都市では、人口減少や現代の生活スタイルとの乖離に起因する、地域資産や活動の担い手不足といった課題が生じている。

2011年に歴史的風致維持向上計画の重点区域となった岐阜県恵那市中心部の中山道大井宿地区も同様の問題を抱えている。そのなかで、景観まちづくりという観点から住民ワークショップを開催し、地域の実態を見直しながら議論を展開した。その結果、当初歴史的建物のみに向けられていた意識が、日常の生活に溶け込んでいた水路や小道、季節の歳時などへも展開し、“歴史”という言葉に囚われずにまちの将来像を描き、定住・交流人口の拡大というまちづくり目標を共有するに至った。本事例を通じ、住民の生活を基本とした地方都市の歴史的蓄積を維持向上する景観まちづくりの考え方を議論する。

Key Words : KEIKAN-MACHIZUKURI, workshop, historical town, Ena city

1. はじめに

(1) 研究の背景

景観法（施行2004年）や「地域における歴史的風致の維持向上に関する法律」（同2008年）を受け、全国各地で景観まちづくりや歴史を活かした具体的な地区計画の策定が進められている。景観は地域に根ざす住民の生業や慣習、地形や歴史などの多くの要素の積層が視覚化したものと考えられる。しかし、景観法に基づく計画の実態としては、建物の色彩や高さ制限などの形態規制により、眺めの視覚的調和を図るに留まる例が多く、そこに暮らす人々の生活慣習や伝統にまで踏み込んだものは未だ多くはない。

岐阜県恵那市も2008年度より景観法に基づく景観まちづくりを進めており、2013年度には同市大井町を重点的な対象地域とすることとした。これは中山道大井宿地区が2011年に歴史的風致維持向上計画の重点地区となっ

たことを受けている。対象地区には歴史的資源があるものの少子高齢化が進み、宿場町らしい町屋の並ぶ景観の維持が困難になってきている。こういった状況において対象地区の住民による景観まちづくりワークショップを開催することとなり、著者らが企画・運営にあたった。

(2) 研究の目的

本稿では、岐阜県恵那市大井町中山道大井宿地区で行われた景観まちづくりワークショップを事例として、歴史的蓄積を有する地方都市の住民が、歴史や景観を意識したモノの整備だけではなく、日常の暮らしに根ざす知恵や慣習を後世へ引き継ぐ事の重要性を確認するに至ったプロセスとその成果を報告する。それにより、景観まちづくりを進めるにあたり、街並などの表面的整備に留まらず、地域に根ざす住民の生業や慣習などを引き継いでゆくことの重要性を示唆する。

2. 対象地の概要

(1) 地理的状況

岐阜県恵那市は2004年に旧恵那市と周辺5町村が合併して現在の姿となった、2014年4月1日現在人口約53,327人、面積約504km²の地方都市である。合併後は地域自治区制度を採用し、全13自治区が地域ごとのまちづくりを推進している。2013年度に景観まちづくりを重点的に検討することとなった大井町(図-1)は、2014年4月1日現在人口13,349人、面積約11.54km²で、市内で最も人口の多い自治区である。大井町内にはJR中央本線と明知鉄道が結節する恵那駅や、恵那市役所がある。恵那駅南部では市役所を含む地域で2005年度から土地区画整理事業が進められ、既成市街地の整備が進められている。また、中山道大井宿と重要文化財である武並神社を含むエリアが、2011年に歴史的風致維持向上計画の重点地区(図-2)に指定された。武並神社・市神社や中山道沿いの町屋、明治天皇行在所などの歴史的建造物が含まれている。一方、大井町北部にはリニア中央新幹線及び隣接する中津川市内に駅と車両整備基地の建設が予定されている。これに伴うインフラ整備や宅地開発等により、地域が大きく変化することが予想されている。

(2) 恵那市におけるこれまでの活動

岐阜県恵那市では2008年度より地域別景観計画の検討を行っている。その当初から日本大学、岐阜大学、京都大学、早稲田大学が関与し、恵那市南部の4地域(岩村富田地域・岩村城下地域・山岡地域・明智地域)におい

て住民参加によるワークショップを行ってきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。

その経緯も踏まえ、2013年度には大井町において、早稲田大学が南部の大井“歴まち地区”，日本大学が北部の土々ヶ根・岡瀬沢地区をそれぞれ対象として景観まちづくりの議論を進めた。

本稿で報告する大井“歴まち地区”に関しては、基礎調査として中山道沿いの建物タイプ及び地区内に存在する小規模水路の実態調査を著者らの研究室ですで行った。

対象地には、地域住民によるまちづくり活動をしている、「大井町まちづくり協議会」「中山道大井宿しぶろくの会」等が存在する。特に中山道沿いにある明治天皇行在所は、これらの2団体が中心となって改修を進め、現在観光や地域交流の拠点として無料開放している。

行政の取り組みとしては、中山道沿いにある空き地が購入されるなど、景観まちづくりの拠点整備の為の準備が進んでいる。



図-1 恵那市及び大井町の位置

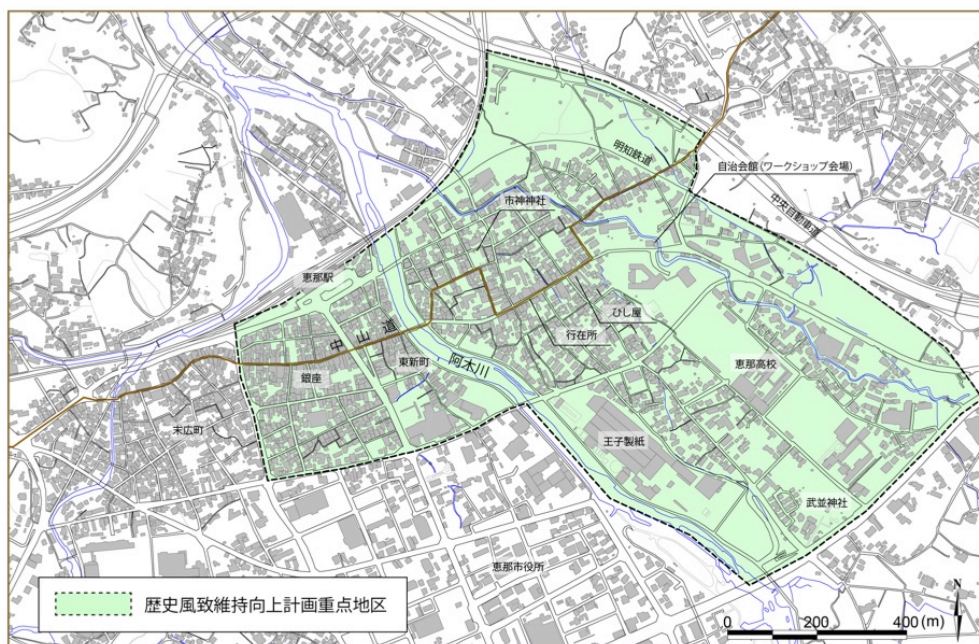


図-2 大井“歴まち地区”地図

3. ワークショップの経緯

(1) ワークショップの目的と概要

前章で述べた状況のなかで、大井“歴まち地区”の景観まちづくりワークショップでは、歴史的風致維持向上計画の実行を前提としながら、住民の議論によって以下の3点を定める事を目的とする。

- ①まちの将来像を思い描く
- ②実現にむけた行動計画を提案する
- ③“歴まち”事業の活用方針を決める

以上の目的を達成する為に4回の計画で毎回のプログラムの検討を行った。当ワークショップは2013年6月を初回として全4回行い、恵那市都市整備課が運営を、早稲田大学と都市計画コンサルタントである㈱プランニングネットワークが進行を、そして早稲田大学学生と京都大学学生がファシリテーターを務めた。各回の概要を表-1に示す。また記録としてニューズレターを作成した。ニューズレターはより多くの参加を促す事を目的とした簡易版と、毎回の詳細な記録として次回に繋げる為の詳細版の2タイプを作った。

以下に各回の報告を示す。

(2) 第1回ワークショップ

初回は、まちあるきにより現状を再確認するところから始めた。この作業により、今後のワークショップの論点が左右されると考え、まちあるきのコースは事前の調査に基づき、以下の点に留意しながら選定した。3つのまちあるきのコースは図-5に示す。

中山道・本町・銀座通りコース

事前調査により、阿木川以西の中山道沿いには、昭和の面影を残す商店街の名残や、ヒヤバと呼ばれる家と家の間の小道、祠や日常生活で使われている形跡の

ある水路があると明らかになった。そこで、まちあるきのコースは、大井“歴まち地区”内に留まらず、中山道の阿木川以西も巡ることにした。また、水路やヒヤバが多く見られる、中山道から外れた小道や裏道を廻るようコースにした。

大井宿場コース

大井“歴まち”地区の中心部を巡るコースだが、中山道沿いだけでなく、水路や水田、地蔵などの景観資源が多く発掘された小道や裏道を中心に巡った。起点はまちの眺望景が望める中山道最東端とした。

武並神社コース

国の重要文化財である武並神社を起点として中山道へ向かうルートである。住宅街の中にわずかに残った赴きのある水路を確認し、また暗渠化された水路を流れる水の音を聞きながらまちを巡るコースとした。



図-3 中山道・本町・銀座コースで撮影された景観資源



図-4 大井宿場コースで撮影された景観資源

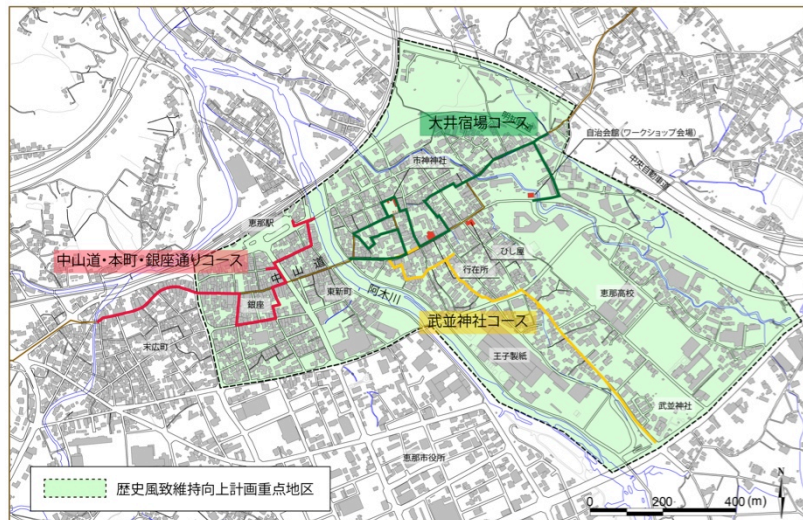


図-5 現状把握の為のまちあるきコース

表-1 ワークショップ各回の内容と結果

実施回/日時	目的	内容と結果	
第1回 2013.6.15(土) 13:30～16:30 参加者 25人	対象地の現状確認 「まずは対象地区の現状を見てみよう」	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図-3に示すコースを基本として対象地内を1時間程度散策し、その際自由に気になったものを写真撮影した。 ・ まち歩き後、確認されたまちの現状を地域の魅力と課題、その他に分けながら地図上で共有し、発表した。
		結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ まち歩きにより、世代を越えてまちの情報が共有された。 ・ 住民から出てきた情報は歴史的街並に関わるものに留まらず、日常生活に関する情報、大井町の伝統行事に関わる情報など多岐に渡った。
第1回ワークショップの宿題		<ul style="list-style-type: none"> ・ 範囲を決めずに各自改めて大井町内を歩いてもらい、気になったものを配布したインスタントカメラで撮影し、コメントを添えて提出してもらった。 	
第2回 2013.8.3(土) 13:30～16:30 参加者 19人	地区の景観資源と課題の確認 まちのヴィジョンの共有 「地区の景観資源と課題を確認し、まちのヴィジョンを議論しよう」	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の宿題として街中の気になるものを撮ってきてもらった写真を全体で共有し、「特別な思いがある風景・場所・もの」に一人一人が投票した。 ・ さらに、写真を見ながらそれにつわるエピソードを語った。 ・ 第1回で出てきた課題や提案を踏まえ、グループ毎にまちの目標像を議論した。
		結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全グループが最終目標に定住・交流人口の増加を据えていた。 ・ まちの将来像の実現にむけた取り組み課題として、以下が提案された。 <ol style="list-style-type: none"> ①武並神社のお祭りの再生 ②中山道西側の商店街の活性化 ③子供と高齢者など、多世代交流のできる場をつくる・運営を継続させる ④ヒヤバや水路など独特な空間を活かす ⑤新しい仕組みを考える
第3回 2013.8.31(土) 13:30～16:30 参加者 22名	まちのヴィジョン実現の為の行動計画策定 「まちのヴィジョンを実現するための行動計画を考えよう」	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回ワークショップで出た取り組み課題の中でも特にc,dに着目し、大井宿中心部の地図上で資源活用を具体案を提案した。 ・ 現在町内で行われている行事と上記の具体案を、担い手を考えながら「くらしの歳時記」にまとめた。
		結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市の取得した土地に対し、東屋や朝市等交流の場としての活用案が多く出た。 ・ 明治天皇行在所についても、ただ保存するのではなく、伝統行事や地域交流の拠点として活用する・敷地内の住居部を借家にするなど、「使い続ける」という視点に立った案が多く出た。
第4回 2013.10.5(土) 13:30～16:30 参加者 13名	まちづくり目標と具体的な活動のまとめ 「大井“歴まち地区”のまちづくりの目標と具体的な活動をまとめよう」	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでのWSを踏まえた以下の5つをまちづくり基本方針を確認した。 <ol style="list-style-type: none"> ①季節を楽しみ、自然の恵みに感謝するまち ②異なる世代、ちがう人々との出会いを大切にすまち ③長く使ってきたものを大切にすまち ④疲れたときにひとやすみできるまち ⑤商売繁盛のまち ・ 一旦外部の視点に立ち、基本方針に基づきながら、これまでのWSで出た意見や要望を実現させるまちづくりプロジェクトを提案した。
		結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ プロジェクト案は全部で8つ出てきた。大きく以下の3つに分けられた。 <ol style="list-style-type: none"> ①ポケットパークの活用を考えたプロジェクト ポケットパークに、かつて地域の伝統行事に使われた武並神社の山車を展示する。また、毎月「七日市」という朝市を開く、地域文化の伝承の場とするなど、文化・交流の拠点としての活用。 ②行在所・林家（行在所の隣の町屋）を中心に考えたプロジェクト 行在所と林家を一体整備し、世代を越えたコミュニティ創出の拠点として活用。特に行在所の住居部や林家は、人に住んでもらって使い続ける。 ③面での整備を考えたプロジェクト 街中に張り巡らされた水路を再整備し、水路・ヒヤバ（家と家の間の小道）を活かしたウォーキングコースを確保することで人を呼び込む。

(3) 第2回ワークショップ

第1回では、歴史的建造物に限らず、水路やヒヤバなど生活に根ざした景観資源に気付いた。さらに、宿題として撮影された写真から「特別な思いのあるもの」に投票する作業により、住民間の共感を誘う景観資源の再確認や価値の共有に至った。そのうえで、それらの景観資源が自分達の生活とどのように関わっているのかを、写

真に関わる自らのエピソードを話してもらい再確認した。このようにまちの景観要素と住民の生活に潜む慣習や伝統等の行動との関係性を考えつつ、まちの解決すべき課題と目標、その為の提案をまとめた。その際、第1回で出てきた意見を一つずつカード(図-6)にして並べ、切り口として論議を進め易いように工夫した。カード化したことで各項目の関連性や順位付けを容易にした。

(4) 第3回ワークショップ

第2回で出てきたヴィジョンを実現する取り組みを、地図上で具体案化した。地図の範囲は、現実的に整備・活用が望めるポケットパーク、行在所及び行在所に隣接する林家を含む範囲とし、詳細な具体案が出せるよう、縮尺の小さい地図を用いた。この際も図-7に示すアイテムカードを用意し、整備する「もの」だけでなく、その場所で行う「こと」を考えながら具体案が出るよう工夫した。カードは白紙も用意し、新たなアイデアをカードにしてまとめられるようにした。

さらに、図-8のように「くらしの歳時記」にいつ・誰が主体となって行うのかを明確化して提案を書き込み、日常生活のどのような行動に即した提案なのか振り返った。同時に既存の行事も確認し、改めて大井“歴まち地区”に存在する豊富な伝統行事を再認識するに至った。

(5) 第4回ワークショップ

まちづくりプロジェクトの提案では、これまでの住民の意見を一覧にしたプロジェクトメニューカードを用意することで、第3回での内容に囚われず、再度視野を広げて議論を展開した。プロジェクトが基本方針のどの項に則るものなのかを吟味しつつ、詳細を詰めた。さらに、各プロジェクト案に対し市役所の可知課長、プランニングネットワークの伊藤代表に評価・アドバイスを頂き、実現に繋げる為のヴィジョンを共有した。

4. ワークショップの成果とその活用

当初住民の意識は、“歴史”や“景観”という言葉から直接的に連想される、町屋や蔵の並ぶ宿場町としての整備に向いていた。本ワークショップを通じて再度自分達の生活を見直した事により、住民は、水路やヒヤバといった生活に根ざした景観資源、慣習や伝統行事を引き継いで行くことの価値を再認識し、「定住・交流人口の増加」という目標を立てるに至った。こうして得られたまちづくり目標や基本方針、プロジェクト案などの成果は、それに至った簡潔な経緯とともにリーフレット(図-10)にまとめた。リーフレットには写真よりもイラストを中心に載せ、大井“歴まち地区”の将来像を、具体的なモノとしてイメージするのではなく、人々の生活の営みや慣習などの行動と共に生活の場面を思い描く事を期待した。

このリーフレットは今後、具体的な整備や活動支持等の事業を行う際に、関係する住民にこれまでの成果を伝えるために使う事を意図している。さらに個々の事業が具体化していくなかで、その本当の目的や意図がぶれていくことが考えられるため、常に何の目的を確認する為に活用する事も意図している。すでに

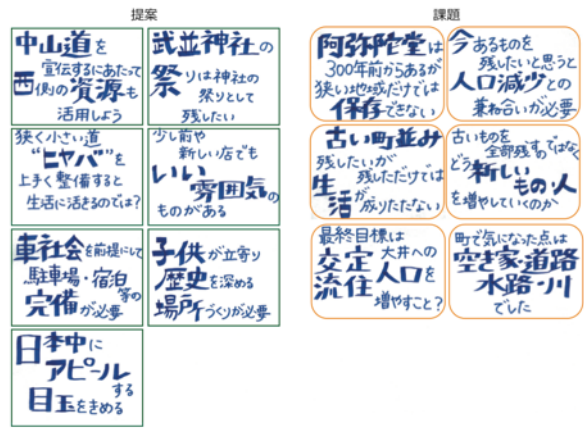


図-6 まちの課題・提案に関する切り口カード

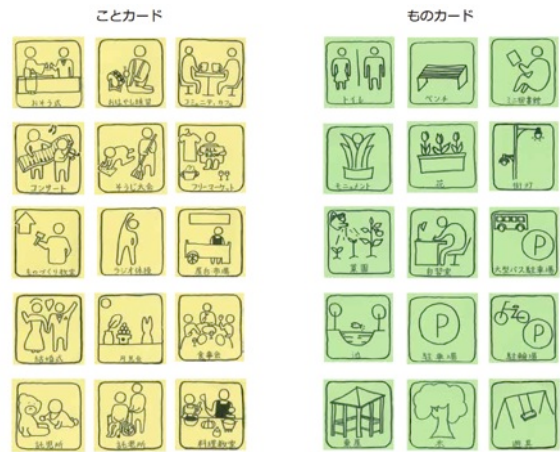


図-7 具体的提案の為のアイテムカード

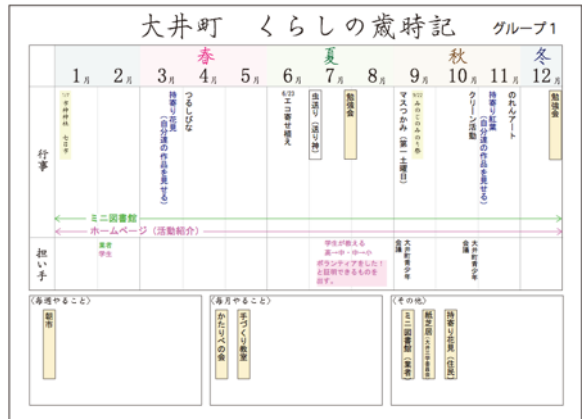


図-8 くらしの歳時記



図-9 プロジェクトメニューカード

2014年3月23日には、ポケットパークと行在所の具体的な活用案についての住民との意見交換を行う際に、本リーフレットを活用している。今後は“歴まち”整備計画等に基づく事業の具体的な結論を、これらの成果を活かして、展開していく予定である。

5. 景観まちづくりワークショップの意義と展望

本事例では、景観まちづくりの推進にあたり、まちの現状や要望を自身の生活と丁寧に照らし合わせることで、住民自らが日常の暮らしに根ざした知恵や慣習の価値を再認識し、それを後世へ引き継ぐ事の重要性を共有する事ができた。歴史的資源を活かしたまちづくりの議論においても、当該地域に蓄積されてきた日常的な暮らしの継承をめざすことから、地域の実態に即した、持続的な景観まちづくりを展開する可能性があると考えられる。

参考文献

- 1) 川島正嵩, 岡田智秀他: 拠点分散地域における交流型景観まちづくりに関する考察-岐阜県恵那市山岡町における景観まちづくりワークショップの取り組みから-, 土木計画学研究講演集, Vol.41, CD-rom, 2010
- 2) 岡田智秀, 横内憲久他: 岐阜県恵那市山岡町における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果, 土木計画学研究講演集, Vol.41, CD-rom, 2010
- 3) 佐々木葉, 井下田渉: 地域に積層する履歴の痕跡を活かした地方都市の景観まちづくりへの取り組み-岐阜県恵那市明智町を対象として-, Vol.43, CD-rom, 2011
- 4) 佐々木葉, 井下田渉: 地方都市における個別建物更新のメカニズムと景観まちづくり-個々の住民の暮らしの総体的方向性のマネジメントと町並の位置づけ-, 土木学会計画研究講演集, Vol.45, CD-rom, 2012



図-10 ワークショップの成果をまとめたリーフレット（一部抜粋）

(2014. 4. 24 受付)

A STUDY ON REGIONAL LANDSCAPE IMPROVEMENT ACTIVITIES IN LOCAL TOWN WITH HISTORICAL STOCKS -CASE STUDY ON WORKSHOPS FOR MACHIZUKURI IN OICHO, ENA CITY-

Eriko MATSUDA, Yoh SASAKI, and Shohei YASUNAGA

Act of Maintenance and Enhancement in Region Historic Scenic has examined the Machizukuri process in many historic places since the enforcement in 2008. However, those area is facing the problem of depopulation and the changes of lifestyle. Due to that, the inadequate of people in taking the responsibility of region asset and activities has become the issue of the area.

The center of Ena City, Nakasendo Oijuku area in Gifu Prefecture, which has become one of the important area in enhancing the historic scenic planning in 2011 has facing the same problem. Among the enhancement effort, the community workshop based on the Keikan Machizukuri viewpoint has been launched to review the actual situation of the region and discussion has been made. As a result, the consciousness of consider only historic building during Machizukuri process was then focused in waterway, small lane and seasonal event and other elements which were integrated intimately in daily lifestyle of local people. It is not merely limited by the term of 'Historic' only but aims to expand the permanent and nonresident population for future planning. Thus, the idea of enhancing the historic element in Keikan Machidukuri process based on the resident's daily lifestyle in this local town will be discussed in this paper.